

2020 4/28・5/12 合併号

No.2113・2114

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、人出が少なくなった横浜・山下公園の沖合を飛ぶウミネコ。遠くに横浜ベイブリッジを望む。



contents

| | |
|------------------------------------|----|
| 視点点描 | 3 |
| 市民文芸支え50年 | |
| 新型コロナウイルス | 4 |
| 荒野の世界が出現するのか コロナショックの行く先 | |
| デモクラシーの現場から | 8 |
| コロナと安倍政権 | |
| 政治 | 10 |
| 安倍首相続投も `コロナ次第、 レガシーなき長期政権に終わるか | |
| くらし2020 | 14 |
| ネットで初診OK | |
| アジアの風 | 16 |
| マスク2枚よりSMS | |
| こふく 口福の源 | 17 |
| こんなときこそ… | |
| NNAアジア経済レポート | 18 |
| 会員コーナー | 19 |

事務局だより

新型コロナウイルス感染拡大の影響を考慮し、さらに会員の皆様の健康と安全を最優先する観点から、「5月の定例講演会」は中止とさせていただきます。

【お知らせ】 神奈川政経懇話会ではホームページと会報「政経かながわ」に会員コーナーを設け、新商品の紹介、地域貢献活動、人事などジャンルを問わずさまざまな会員情報を掲載しています。掲載の問い合わせなどは事務局 ☎045(226) 2121。

視点 点描



市民文芸支え50年

市民文芸の振興を掲げ、本紙が取り組んできた二つの事業が今年、そろって50回を迎えた。

県内在住・在勤・在学者を対象に短編小説と現代詩の二部門を設けている「神奈川新聞文芸コンクール」は、神奈川ゆかりの文人が選考に携わり、入賞作を本紙に全文掲載するという地元紙ならではの取り組みである。

今年も節目を盛り上げようと、

秋に構える授賞式に向けて歴代審査員による書き下ろしエッセイを月1回ほどのペースで日曜版に掲載。4月の初回は神奈川近代文学館長でもある作家の辻原登さんが筆を寄せた。改めて歴代を振り返ってみたい。

短編小説部門は、初代から立原正秋、宮原昭夫、山田智彦、佐江

衆一、岡松和夫、阿部昭、中野孝次、豊田穰、三木卓、安西篤子、山本道子、畑山博、古山高麗雄、皆川博子、井上ひさし、藤沢周、高橋源一郎、西木正明、北方謙三、辻原登、三浦しをん、島田雅彦、山田太一、伊東潤、角田光代の各氏。

現代詩部門は、近藤東、井手文

雄、長島三芳、扇谷義男、山田今次、中島可一郎、今辻和典、寛楨二、手塚久子、川崎洋、小海永二、伊藤海彦、南川周三、水橋晋、安藤元雄、八木幹夫、佐川亜紀、中上哲夫、水野るり子、柴田千晶、平林敏彦、城戸朱理、甘楽順治、中島悦子、金井雄二の各氏。

鬼籍に入られた方も多いが、両部門とも2年任期で総勢50人。そうそうたる顔ぶれは神奈川の文学的土壌の豊かさといえよう。

一方の「神奈川歌壇・俳壇・柳壇年間賞」は、歌俳柳のページ(毎

週日曜)に掲載された投稿作品から各壇の年間ベスト3を選び表彰してきた。結社で腕を磨いている人もいれば学生や一見さん(いちげん)もいる。3月に予定していた授賞式と50回記念イベントは新型コロナウイルス感染症拡大を受けて中止に至ったものの、毎週の投稿に陰りはない。

非常へと転じた日々から生まれた作品はどれも時代を映す鏡であり、その言葉に力付けられることも多い。「こんなときこそ日常を詠む大切さが注目されていいだろう」と本紙歌壇時評を担当する中川佐和子さんも投げ掛ける。

自粛や制約が求められる今、言葉による表現や創作は、自らを解き放つ身近な手段である。いかなる状況下でも守られるべきものであると改めて実感している。

(神奈川新聞社文化部長 高田 久美子)